

## 【書評】

# 「斎藤茂吉 悩める精神病医の眼差し」

小泉博明著（ミネルヴァ書房・6480円・2016年3月10日初版）

## 病者に寄り添う精神病医斎藤茂吉の日常を 鮮やかに描き出す研究書

川 崎 清\*

本書はA5版378頁からなり、以下に示す章立てになっている。

序 章 病者への眼差し	第八章 青山脳病院院長としての仕事と病院の現状
第一章 東京帝国大学医科大学時代	第九章 青山脳病院院長の診察風景
第二章 巣鴨病院時代	第十章 戦時下の青山脳病院院長時代
第三章 長崎医学専門学校時代	第十一章 病気観
第四章 ウィーン大学神経学研究所への留学	第十二章 女性観
第五章 ドイツ精神病学研究所での生活	第十三章 作品に見る病者への眼差し
第六章 青山脳病院の再建	第十四章 老いの諸相
第七章 青山脳病院院長就任と紀一の死	終 章 病者に寄り添う

この章立てを見てもわかるように、本書は斎藤茂吉の精神病医としての思想と行動に焦点をあてて、茂吉の生涯を描こうとする試みである。人生の節目ごとに茂吉が遭遇した様々な困難極まる出来事とそれに対して茂吉が何を感じ、何を考え、どう対処したのか、その内面の動きと行動を描き出す論攷である。また同時に本書は、日本社会が精神科医療や衛生思想の面で徐々に近代化を遂げていく過程を、茂吉の目を通して内側から描き出す歴史書ともなっている。それは本書において、国内外の精神科医療の研究と治療の現場が生き生きと描かれるからである。茂吉が留学先で高名な医学者たちと対面する場面、彼の地で研修する医学的知見の内容紹介、帰国後青山脳病院において様々な症状を呈する精神病患者の治療にあたる場面、これらをめぐる数々の描写が、そのまま日本の精神科医療史の点描となっていると思われる。

---

\* 経営学部教授／英語学・言語学

読者の多くは歌人茂吉についてはそれなりの知識を持っているであろう。しかし、精神病医茂吉の姿は思い浮かばない人が多いのではなかろうか。書評子も本書を読み、茂吉が歌人である前に、まず精神病医として激職といえる日々を送っていたことを理解したのである。

本書の白眉をなすのは、茂吉の「青山脳病院時代」の叙述である。全体の3分の1にあたる5つの章（総計124頁）を割いて茂吉の艱難辛苦を描き出している。1925年から1945年の20年間のことであり、茂吉43歳から63歳までのことである。

茂吉は東京帝国大学医科大学卒業後、巢鴨病院の医員として7年間勤務する。その後、長崎医学専門学校教授に就任、3年4ヶ月在任する。そして大正10年（1921）10月、医学博士号取得を目指して欧州留学に出発した。茂吉は既に39歳になっていた。大正14年（1925）1月7日、茂吉は念願の博士号を取得し帰国する。しかし、帰国数日前の12月29日に青山脳病院は失火により全焼していた。茂吉は筆舌に尽くし難い苦勞の末に焼失した青山脳病院を世田谷区松原に再建し、養父紀一の院長引退を受けて病院長となった。昭和2年（1927）茂吉45歳のことである。全責任が自分の肩にかかる茂吉は、精神病医としてまた病院経営者として、患者の逃走や自殺に悩まされる。患者が自殺したとなると、茂吉は実にせわしない対応を余儀なくされるのだ。茂吉は昼夜を問わず電話で呼び出され、病院に駆けつける。そして事態の把握に努め、遺族と見舞金等の折衝にあたり、その日の内に病院長として警察に出頭し、事の経緯を説明しなければならなかった。当時は精神病が医療問題ではなく、治安問題として管理される時代であったからである。茂吉は病院内での患者の自殺の再発を防止するため、縊死の道具となった腰ひもの幅を広くし固い素材にして首に巻けないものを自ら考案した。それを安全帯と呼び、自殺の防止に心を砕いたのである。この行為は目立つものではないが、茂吉の心に患者の命を大切に思い、患者を守る決意がなければできないことである。著者小泉は、この例に見るような茂吉の思想と行動を本書の随所において描き出し、患者に寄り添う精神病医としての茂吉像を読者に提示している。

偉大な人物は誰でも毀誉褒貶の対象となる。それ故、茂吉への批判も以前からあった。その中でも精神科医であり精神科医療史の研究者でもある岡田靖雄からの批判が最も辛辣である。岡田は次のように批判する。「茂吉は『狂』の字、さらに『瘋癲』の文字を『愛用（とってよかろう）した』（略）、茂吉のうたう『狂人』『狂院』は歌へののりがよいと、歌人であることをえらんだのである。榊、呉がするどくいだいた差別問題への意識をかれはかいていたというしかあるまい」（本書p.47）。この批判文に解説を加えると、文中の「榊」は榊<sup>はじめ</sup>俣といい、東京帝国大学医科大学精神科教授であり、東京府癲狂院から「狂」の字を外すことを提案し、病院名を東京府巢鴨病院と改称した人である。「呉」は呉秀三のことであり、彼は榊の後継者として、病者に拘束具を装着し自由を奪う拘禁的医療は非人間的であると断じて、それを廃止した精神病医療の改革者であった。これらの先覚者たちは精神病患者に向けられた当時の偏見と差

別に対して敢然と闘った。しかし、彼らの薫陶を受けたにもかかわらず、茂吉は「狂人、瘋癲」といった差別語を自分の短歌に平然と詠み込んでいると岡田は厳しく批判するのである。

著者小泉はこれに対し、当時は精神病者に言及する新聞記事においても通例は「狂」の字が使用され、報道機関にさえ「狂」を含む表記に差別語という意識がなかったことを指摘する。そして、そのような社会全体の風潮の中で、茂吉のみ引き合いに出して、差別に対する意識の欠落を非難するのは公平でないと論駁するのである。更に小泉は、上に引いた安全帯考案の例でも分かるように、茂吉の実際の行動を見れば、そこには、病者に辛抱強く寄り添い、その恢復に尽力する精神病医としての茂吉の姿を認めざるを得ないと弁護している。その辺の事情を本書に引用されている茂吉の短歌から一首を引いて見ておこう。

気ぐるいし 老人ひとり わが門を 癒えてかえりゆく 涙ぐましも

精神病は診断法も治療法も当時は確立していなかった。それ故なかなか治らない病であった。しかしある日、一人の老患者が全快して退院する。上の歌はそのときの病院長としての感動を詠んだものである。初句に「気ぐるいし」の言葉があるが、茂吉の心に差別意識があったとは書評子には思えない。なぜならば、差別意識があれば、結句の「涙ぐましも」は出てくるはずのない言葉だからである。

岡田靖雄はまた次のように批判する。「どうも、医業より歌作りこそが自分の使命だとかがえていたようである」(本書p.170)。更に岡田靖雄は茂吉に次の否定的評価を下すのである。「かれはたいへんに努力して医業にもあたり、(略)精神鑑定もかなりおおくやっているし、往診にもはげんだ。だが、つきはなしていえば、歌人にしては院長として頑張っているが、本来ならば院長業務にもっと力を入れるべきでなかったか」(本書p.203)。

読者は、歌人茂吉の印象が余りにも強く大きいために、岡田の言うように、茂吉は歌道を医道の上に置いたと考えるかもしれない。というのも、茂吉は歌人として歌集を17冊も刊行し、多くの歌論書、歌人研究書を上梓しているからだ。昭和15年(1940)には「柿本人麿」の研究で帝国学士院賞の榮に輝き、更に昭和25年(1950)には第一回読売文学賞詩歌賞を受賞する。そして昭和26年(1951)には短歌界への長年にわたる大きな貢献が認められて、学者、文化人に国家が与える最高榮譽である文化勲章を受章するに至るからである。

茂吉は短歌を詠むことをしばしば「業余のすさび」と称して、あくまでも本業は精神病医であるという。しかし、短歌の道における茂吉の足跡は「業余のすさび」、すなわち「生業のかたわらで行う趣味」と呼ぶには余りにも偉大な業績であった。ただ問題は、これらの業績が岡田の批判するように、歌道を医道の上に置いて、歌道に邁進したが故に達成しえたものであるかどうか、という点である。著者小泉は、茂吉は歌道の道に励むと同時に、精神病医として病者の日常に寄り添い、地道に治療にあたっていたのであり、決して歌道を医道の上に置くこと

はなかったと主張する。その辺の事情を示す証拠は、上に述べたように、本書の全体を通して、随所に提示されている。ここでは、本書に引用されている茂吉が詠んだ短歌から一首を引いて、その辺の事情を見ておこう。

一夜あけば ものぐるひらの 疥癬に 葉のあぶら われは塗るべし

疥癬は掻き傷から出る膿みと血がまじりあい、皮膚が糜爛する病である。その患者の皮膚は、はたから見ると気味が悪く、素手で触れるのは躊躇われる。だが茂吉は、疥癬にかかって苦しむ精神病患者の指間や腕、わきの下にまでも素手で油を塗って、痒さをやわらげてやろうとしているのである。患者の糜爛した皮膚に自分の手で軟膏を塗布してやる治療行為は医師としては当然のことと余人は言うかもしれない。しかし、この短歌から見えてくる、必要な治療行為を日々粛々と励行する茂吉の姿からは、医道をおろそかにして、歌道に血道を上げる医者という感触は微塵も感じられない。当然すべき治療をたゆまず実践することこそ医師の倫理にかなった生き方であり、茂吉の日常はまさにそのように生きられたことが本書の全体の記述から分かるからだ。茂吉は歌道を医道の上に置いたとは言えないとする小泉の岡田に対する反論に書評子も賛意を表さざるを得ないのである。

本書における注目すべきもう一つの点は、茂吉の「女性観」を論じた第十二章である。これまでの茂吉評伝では、永井ふさ子という女性と茂吉との交流を詳細に論じることは避けられていた。その交流は茂吉の人生の瑕疵とも言えるものだったからである。また、評伝が茂吉の弟子筋にあたる人物か、あるいは崇拜者によって書かれることが多かったので、茂吉に対する遠慮からその事件を忌避したい気持ちがあり、その間の消息をこまごまとは書けなかったのであろう。しかし今回、著者小泉は資料に基づいて茂吉と永井ふさ子との出会いから別れまでを詳細に論じている。向島百花園で開かれた子規の33回忌を記念する歌会の席で、すでに高名な歌人となっていた52歳の茂吉と25歳の永井ふさ子とが出会い、二人の恋愛は始まるのである。昭和9年(1934)9月のことであった。茂吉は愚直なまでに生真面目で、人付き合いは不器用な人間なので、27歳も年の離れた女性との手紙のやり取りや逢瀬の際の言動は、茂吉の年齢と地位を考慮すれば、痴戯醜態を極めたものとなる。また、この前年に茂吉の妻てる子はダンスホール事件と呼ばれる醜聞に関係して世間に恥を曝していたが、茂吉はその妻と離婚し、ふさ子と一緒にするわけでもなく、人目を気にしてビクビクしながら漫然と逢瀬を重ねるのである。ふさ子の側からすれば、世間の尊崇を集める歌人でありながら、身勝手に振る舞う茂吉にさぞや困惑し傷ついたことであろう。しかし、淫欲を抑える意志力を欠き、問題解決の糸口を探すために自分から行動することもできない、この不甲斐ない醜い姿も、老境に向かう茂吉に露出した彼の一面であることは事実なのだ。小泉の筆はこのあたりの消息を隠蔽しない。恐らく、この件の詳細な経緯は本書でしか読めないのではないかと思う。

これまでも茂吉の評伝はいくつもあり、歌人茂吉に焦点をあてたもの、精神病医茂吉に焦点をあてたもの、ともに多くの先行研究があった。どれも400頁、500頁といった浩瀚の書であり、それらを渉猟するだけでも大変な時間と労力を要する。しかし今回、著者小泉は先人の業績を博捜し、いくつかの論点に異を唱え、故なき批判には反論して、「病者にどこまでも寄り添う精神病医茂吉」という新たな茂吉像を提示した。そして自説を裏付けるために、茂吉の日記、書簡、随筆といった多くの文献を丹念に読み込み、その文脈から抽出された文意を新たな茂吉像を支える直接証拠とし、茂吉が折々に詠んだ短歌の歌意をその傍証としたのである。

本書には202首もの短歌が引用されている。しかし、その短歌の歌意を傍証にとどめるのは、注意深く選ばれた著者小泉の執筆上の戦略であり、心理的抑制でもある。小泉は短歌の評釈を十分にできる人と思われるが、本書ではそれを敢えてしていない。本書が、ともすれば主観に流れやすい歌論を叙するための著作ではなく、精神病医としての茂吉の実生活と内面の実像を客観的に明らかにするためのものと小泉が思い定めたからであろう。急いで付け加えると、歌人茂吉の理解を深めるために本書を手にとった読者にとり、本書が裨益するところがないというわけではない。事実は全くその逆である。むしろ本書を読むことによって、従来は歌人茂吉の影に隠れて余り注目されることのなかった精神病医としての茂吉の姿をはっきりと視野におさめることができ、精神病医茂吉の人間の苦悩と成長を知って、歌人茂吉についての理解も一層行き届いたものとなるからである。本書を読むことは、畢竟するに、斎藤茂吉という人間の全体像を深く理解することにつながるであろう。本書の一読を強く推奨する所以である。

(2016.9.23 受稿, 2016.11.29 受理)